チェックリストでチェックできるかをチェックリストでチェックしよう

Why Don't We Check Our Checklists with The Checklist to Check Checklists?

平岡 齊士

Naoshi HIRAOKA

熊本大学 教授システム学研究センター

Research Center for Instructional Systems, Kumamoto University

<あらまし>教育場面で用いられるチェックリストにおいて、チェック項目がチェック可能な内容になっているか、またそのチェック項目でチェックする人はチェックをするための前提条件を満たしているかをチェックするためのチェックリストを作成した。

<キーワード> チェックリスト チェック項目の明確性 チェックする人の条件

1. はじめに

世の中にはチェックリストが多数存在し、今も増え続けている。しかし、そのチェックリストは意図通りのチェックができるように設計されているだろうか。意図通りにチェックできる設計になっていたとしても、チェックリストを使ってチェックする人（以降、チェッカーと呼ぶ）はそのチェックリストでチェックするための適性を備えているだろうか。

本稿では世にあふれる不適切なチェックリストを減らし、適切なチェッカーが適切なチェックリストで適切にチェックするための一助となることを目指し、チェックリストが適切であるための要件と、チェッカーの適性をチェックするためのチェックリストを提案する。なお、本稿ではチェックリストを「チェック項目に即して対象をチェックするためのツール」と位置づけ、特に教育場面に使用されるチェックリストを対象とする。

2. チェックリスト側の問題の分析

チェックリスト側の問題を、チェック項目が適切であるかどうかと、評定方法が適切かどうかを、「教員の ICT 活用指導力のチェックリスト（中学校・高等学校版）」（文部科学省，2007）（注1）を材料として検討する。

2.1. チェック項目は適切か 「教員の ICT 活用指導力のチェックリスト」の最初の項目は「A-1 教育効果をあげるには、どの場面にどのようにしてコンピュータやインターネットなどを利用すればよいかを計画する。」である。この項目は「教育効果を得るために、明確な学習目標を設定し、さらにその学習目標に合致した評価方法を設定し、またさらにその評価方法で合格するための学

習において、コンピュータやインターネットなどをその特性に応じて適切に活用することを前提とし、また可能とする授業設計ができる」ことをチェックするためのものと推察される。このように複数の評価対象を1つの項目でチェックするのは不可能である。仮に項目を分けたとしても「『教育効果をあげる』は多義的であって不明確」、「『どの場面にどのようにして利用すればよいかを計画する』という表現が抽象的」、「『コンピュータやインターネットなど』の『など』には何が含まれるのかが不明確」であり、本来の意図通りにチェックすることは付度なしでは困難であろう。

2.2. 評価方法は適切か 「教員の ICT 活用指導力のチェックリスト」は、「4わりにできる」「3ややできる」「2あまりできない」「1ほとんどできない」の4段階で評価される。「わりにできる」とは「思ったよりもできる、比較的できる」の意味であり、これを文字通りの意味で選択したとすれば、比較対象がわからない限り、どの程度「できる」のかが不明である。また、前節で指摘したように項目内に複数の評価対象があるため「教育設計は得意だが、コンピュータはちょっと苦手…」のような場合には評価ができなくなる。

3. チェッカー側の問題の分析

自動車の運転には免許が必要だが、チェックリストを使用するために資格が必要とされることは稀である。しかし、チェックリストは誰でも設計意図通りに使えるとは限らない。たとえば、シラバスのチェックリストの項目として「学習目標が記載されている」があったとする。この場合は「あるかないか」だけを確認すればよいので知識

も技能も必要ない。それに対し「記載された学習目標が適切である」の場合は、学習目標が適切かどうかを判断するための技能が必要である。このように項目をチェックするために知識や技能が必要である場合は、チェッカーがそれらを備えていることがチェックの前提となる。

4. チェックリストのチェックリスト

以上を踏まえ、チェック項目が評価可能であるかをチェックするチェックリスト（表1）と、チェック項目のチェッカーの条件をチェックするチェックリスト（表2）を作成した。各チェックリストの左列の数字は2つのチェックリストを通して使う場合の通し番号である。このチェックリストを使用する際にも当然ながらチェッカーの条件が存在するため、各チェックリストの右列に、その項目のチェッカーの条件を記載している。

表1. チェック項目が評価可能であるかをチェックするチェックリスト

No.	チェック項目の評価可能性をチェックするチェック項目		NGの例	OKの例	チェック項目のチェッカーの条件
1	1項目で一つのことを問うている	OK/NG	B-1 学習に対する生徒の興味・関心を高めるために、コンピュータや提示装置などを活用して資料などを効果的に提示する。	学習に対する生徒の興味・関心を高めるための方策を列挙できる（知識） 指定された学習目標に対する生徒の興味・関心を高めることを目的とした、コンピュータの活用法を提案できる（技能） 提示装置を用いて、教室のどの席からでもはっきりと見えるように資料を提示できる（技能）	なし
2	問うている内容が明確である	OK/NG			項目が明確であるかどうかを判断できる（技能）
3	評価方法がチェック項目と合致している	OK/NG	項目： C-1 生徒がコンピュータやインターネットなどを活用して、情報を収集したり選択したりできるように指導する。 評価方法： 「4わりにできる」「3ややできる」「2あまりできない」「1ほとんどできない」の4段階で評価。	項目： インターネットを使って情報収集する方法を3種類以上説明できる（知識） 評価方法： 「3種類以上説明できる」「2種類説明できる」「1種類説明できる」「説明できない」の4段階で評価。 項目： インターネットで収集した情報を事実と意見とに分けて整理するための教授設計ができる（技能） 評価方法： 「できる」「できない」の2段階で評価。	質問項目の特性に即した評価方法であるかどうかを判断できる（技能）

*NGの例の「B-1」「C-1」は「教員のICT活用指導力のチェックリスト」の通し番号(?)である。

表2. チェック項目のチェッカーの条件をチェックするチェックリスト

No.	チェック項目をチェックするため必要となる条件をチェックするためのチェック項目	チェック項目とその項目のチェッカーとなる条件の例		チェック項目のチェッカーの条件
		チェック項目（例）	チェッカーの条件（例）	
4	ある・ないで答えられる	OK/NG	学習目標が記載されている	なし
5	チェックには知識が必要	OK/NG	学習目標の内容が、科目の学習目標として妥当である	内容領域専門家（SME）としての知識・経験が必要
6	チェックには技能が必要	OK/NG	最終テストが、学習目標の達成をチェックできるものである	教授設計の技能が必要

5. おわりに

このチェックリストは粗削りではあるが、逆に言えば無限の可能性を秘めている。チェックリストの未来のために今後の発展を期待したい。

参考文献

文部科学省ウェブサイト（2018/7/9 参照）教員のICT活用指導力のチェックリスト（中学校・高等学校版）
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1296901.htm

（注1）文部科学省ウェブサイトには「このチェックリストは感覚尺度 [ママ]」「教員自身にICT指導力の弱い部分を認識してもらい、研修に活かしていくことが目的であり、そんなにこだわる必要はない」という設計意図ならびに「わりに」を採用した経緯の説明がある。しかし、本稿では教育工学の発展のため、あえてこだわって検証した。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/039/shiryo/07062933/005.htm（設計意図）

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/039/shiryo/07062933/004/004.htm（「わりに」の採用経緯）